

## 4 月第 1 週の礼拝説教

■日 時：2023 年 4 月 2 日（日）10：30－11：30 受難節第 6 主日（棕梠の主日）

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「主の名によって来られる方」

■聖 書：ルカによる福音書 19 章 28～44 節（新約 p147）

■讃美歌：307 「ダビデの子、ホサナ。祝福あれ、」

313 「愛するイエス、何をなされて」

本日の聖書箇所には、「エルサレムに迎えられる」という小見出しが付けられています。主イエスがそのご生涯の最後にエルサレムに来られた、その時のことが語られているのです。この「エルサレム入城」と呼ばれる出来事から主イエスの最後の一週間、つまり「受難週」が始まります。その週の金曜日に主イエスは十字架につけられて亡くなり、三日目の日曜日に復活なされたのです。

28 節の冒頭に、「イエスはこのように話してから」とあります。「このように話して」とは、直接にはその前の段落の 11 節以下の「ムナのたとえ」を指しています。しかし、その話はさらにその前の 1 節以下の「ザアカイの話」とつながっています。それは 11 節の「人々がこれらのことに聞き入っているとき」という説明から分かります。「徴税人ザアカイ」の話は、ルカによる福音書のみに記載されています。そして、その話に聞き入っている人々に、「ムナのたとえ」が語られたのです。いずれの話も、主イエスがエルサレムに上って行かれる途中に滞在された、エルサレムから 23 km ぐらい離れたエリコの町で出来事でした。今回、19 章全体を読んでみましたら、かつて教会学校や幼稚園などで何度も話したことのあるザアカイの話ですが、主イエスがエルサレムにお入りになる直前の重要な出来事であったことが見えてきました。主イエスはエルサレムに上る途中で、一目でもよいから「イエスがどんな人か」を見ようといちじく桑の木に登ったザアカイの熱意をくみ取ってくださったのです。主イエスが彼の家に来られたことによって、「救いがこの家を訪れた」のです。そうしますと、さらに前に記されている 18 章の終わりの「エリコの近くで盲人をいやす」という出来事も同じ事柄を語っていると言えます。主イエスが来られたことを聞いた目の見えない物乞いが、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と叫び続け、ついに主イエスの救いにあずかったのです。主イエスとの出会いをひたすら求めた二人の人物の姿には、本気で「主の名によって来られる方」に出会いたいという真剣な願いがあったのです。28 節の「イエスはこのように話してから」という何気ないように見えるつなぎの言葉には、そのような背景があることが見えてまいります。

さて、本日の箇所である 29 節、30 節には、「ベトファゲとベタニア」という名前を挙げて、この村へ二人の弟子を使いに出し、一頭の子ろばを調達させたことが記されています。そして、その子ろばに乗ってエルサレムに入られたのです。37 節以下には、主イエスがその子ろばに乗ってエルサレムに入られる時に、それを歓迎して神様を賛美したのは弟子の群れで

あったことを記しています。他の三つの福音書は、大勢の群衆が歓迎の言葉を叫んだとその様子を描いています。私は、長い間福音書を一緒にして、主イエスは群衆たちの歓呼の声に迎えられてエルサレムにお入りになった、けれどもその群衆たちはその週の内に豹変して、主イエスを「十字架につけろ」と叫ぶようになる、と理解していました。そして、その群衆の一人が、私自身であると思っていました。しかし今回、ルカによる福音書を丁寧に読むと、群衆が「ホサナ（どうか私たちを救いたまえ）」と叫びつつ喜んで主イエスを迎えた、といういわゆる「エルサレム入城」の場面をルカによる福音書は描いていないのです。38節に、「主の名によって来られる方、王に、祝福があるように。天には平和、いと高きところには栄光」という賛美の言葉が記されていますが、それを語ったのは、先ほども申し上げたように弟子の群れです。ところが、39節には、「ファリサイ派のある人々が、群衆の中からイエスに向かって、『先生、お弟子たちを叱ってください』と言った。」と記されていますから、この場面に群衆は確かにいるのです。しかし、その群衆が主イエスをほめたたえて歓迎したとは、ルカは語っていないのです。むしろ、群衆の中からファリサイ派の人々は主イエスに向かって文句を言っているのですから、主イエスと弟子たちを眺めている大勢の群衆の視線は、冷ややかなものであったとさえ言えるかもしれません。このことから、ルカによる福音書はこのエルサレム入城の場面において、群衆ではなくて弟子たちが賛美を歌い、主イエスのエルサレム入城を喜んだことを描いていると考えられるのです。けれども実際には、他の三つの福音書が共通して語っているように、群衆のかなりの人々も確かに主イエスを喜び迎えたのでしょう。本日は「棕櫚の主日」として礼拝をささげています。この名前の由来は、ヨハネによる福音書12章12節から13節の「祭りに来ていた大勢の群衆は、イエスがエルサレムに来られると聞き、なつめやしの枝を持って迎えに出た。」にあります。そして、マタイによる福音書は「木の枝」マルコによる福音書は「葉のついた枝」と、記しています。しかしルカによる福音書の著者の関心は、そのようなお祭りの喧騒的な情景に注がれるのではなく、そのような中での弟子たちの姿を見つめて語っているのです。そこに、ルカ福音書におけるエルサレム入城の特色があるのです。

では、ルカによる福音書がひたすら見つめているものは何かと言えば、エルサレムへの主イエスの道行を描きながら、その主イエスに従っていく弟子たちのあり方、つまり信仰者のあり方をずっと見つめているのです。つまりルカの目は常に主イエスに従っていく者たちに向けられているのです。先ほど、少し触れましたが、エリコの近くで物乞いをしていた盲人は主イエスによって目を開かれ、「神をほめたたえながら、イエスに従」いました。ザアカイも、主イエスに名前を呼ばれ、今日あなたの家に泊まると語ってくださった主イエスをお迎えしたことによって、財産の半分を貧しい人々に施し、不正な取り立てを四倍にして返す者へと変えられました。ザアカイは後に教会の指導者の一人になったという言い伝えもあります。そうしますと、38節の言葉の「主の名によって来られる方に祝福があるように」の部分は詩編 118 篇 26 節からの引用で他の福音書と共通していますが、ルカはそこに、「王に」を付け加えている意味が見えてきます。主の名によって来られる方である主イエス

は、神の民のまことの王であられることを明確に言い表しているのです。本日お話ししている「エルサレム入城」の出来事は、旧約聖書のゼカリヤ書 9 章 9 節の実現であると考えられています。そこでは、「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者、高ぶることなく、ろばに乗って来る。雌ろばの子であるろばに乗って」と預言されています。この王のもたらしもの、それは 10 節に「わたしはエフライムから戦車を、エルサレムから軍馬を断つ。戦いの弓は絶たれ、諸国の民に平和が告げられる」と記されているように、平和です。戦いを終らせ、平和をもたらし王であり、ろばの子はその平和の象徴なのです。38 節の弟子たちの賛美に、「天には平和」とあったことがこれとつながります。クリスマスの時の天使の賛美は「地には平和」でした。それが今度は「天に」となっています。「地には平和」というのは、争いに満ちた地に平和を、という祈りです。それに対して「天に平和」というのは、天に争いがあるからそのための祈りを、ということではありません。これは、主イエスがエルサレムに来られ、そこで私たちの罪を全て背負って十字架にかかって死んで下さり、そして復活して天に昇られることによって、天において、つまり神様のみもとで、私たちに罪の赦しと新しい命を与えて下さる神様の救いのみ心が実現し、平和が完成する、そのことをほめたたえる言葉だと言えるでしょう。今年ほど、現在の世界に戦争があり紛争が勃発していることを身近に感じられる受難節は、この数十年の間にはなかったような気がいたします。今こそ、ゼカリヤ書の「わたしはエフライムから戦車を、エルサレムから軍馬を断つ。戦いの弓は絶たれ、諸国の民に平和が告げられる」という御言葉を真剣に聞き、そのことが実現するようにと祈らずにはおられません。そのように、共に祈ってまいりましょう。